【151頁】

同年（慶応二）寅三月七日

一此間御懸用の什器御売払被成候ニ付てハ、御集会相催、右の品被成御売払候処ハ当分御見合なされ候て、先半間中預り山竹木両人ハと申合せ、此段月番より申出候事

増野太兵衛・増野弥一郎

出席

大谷小源治
城一隼雄
内藤磋亮
大谷利兵衛

松原茂一郎
小国正亮
大谷岩尾

吉賀徳三
仁保嘉内
栗山内蔵太

同年三月十四日

一今朝御用の儀有之候ニ付邑政堂え罷出候様申来り増野弥一郎罷出候所、今般医学館被差（替）え済生堂と唱被仰付候ニ付、之依引疱被仰付候ニ付、已後の所ニおるて生堂ニ来ル十七日より追々右場所え罷出候様条、と の授ニ付、及廻達候事

同十八日

一此度御什器御売払已ニてハ中々引足り不申事ニ付、乍御心外御家来内御預ケ山当毛上被召上、器械御買入被仰付候との授ニ付、早速及廻達候事

付り 此度臣民合議書一冊銘々写取相成り候様ニとの儀ニ付別段ニ廻方いたし候事

＊毛上　山林原野における樹木・柴・薪・秣などをいう

＊臣民合議書　「慶応元乙丑年十一月長防士民一統臣子の分無余儀情実申談書取」を、『防長回天史』『忠正公事蹟』に所収

【152頁】

同月（慶応二寅三月）十九日

一御家来中提灯の儀ハ高張・中柄・騎馬張り・弓張等向後治乱・目地・色共に別紙雛形の通、兄弟筋の印を付候様ニとの儀ニ付、此段及廻達候事

月番

増野太兵術・増野弥一郎

＊治乱？

雛形

慶応二寅四月三日

一今朝御用の儀有之候条邑政堂罷出候様申来候ニ付金子新蔵罷出候処、増野又十郎方ニ別紙の通半間中へ相達候様、尚又先方ニ当て御家来内御預ケ山へ御売払ニ付、其段御早速申上候ニ付、其早速及廻達候事

別紙左の通り

半紙・黒保・厚紙の類、下ケ差問時御払下ケの儀願出、相成ケ被仰付儀、ハ有之候へ共免、今般少々此御詮宛御段内儀意相趣

達有之被仰付儀ハ一向不被差免候事

寅四月置候事

＊見分（検分）　立ち合って検査すること

【153頁】

＊請差シ場所払下てもらいたい揚所
＊黒保半紙を漉いた残り原料ですいた紙、
紙質が黒いからいう。

同（慶応二寅四月）八日

一今朝邑政堂呼出ニ付　金子新蔵罷出候処、
増野又十郎方より授の趣は此度御詮儀の
間趣有之、已来於邑政堂有廉会議の節は半
内より両人宛出勤被仰付、月番の内壱
人、今壱人の儀は撰を以被仰付壱
の儀ニ、其時被仰付候事
御座候段早人速及廻達候事

同十二日

一今朝呼出ニ付　金子新蔵邑政堂罷出候処、
増野又十郎方より授の趣は、先達て授ケ
相成候御預ケ山請差シ場所有之御衆中、
未御申出不相成部も有之候ハヽ、来ル十
七日を限り覚書を以仕出相成候様との儀
ニ付、其段早速及廻達候事

同十六日

一邑政堂へ呼出ニ付　金子新蔵罷出候処、
田丹下方より別紙の通り半間中へ相達シ
候様との事ニ付早速及廻達候　尚又御軍
政方より授ケの趣ハ、在須佐御家来中自
身筒持合せの部、玉目弐匁已上六匁迄、
三分鋳形添明匁十七日中ニ節御
武具方迄被差出名札様を付の儀、尤異変
持身持出度銘々の儀は不及其儀との事ニ
付、是又壱通ニシテ廻達致仕出候事

一筆致啓達候　今般幕府より御達の通来ル
別紙左の通
廿一日期限ニ付ハ、趣ニ寄り何時戦争ニ
可立至哉も難斗事ニ付、申も疎ニ御座候へ
共、繰合諸司令士・諸隊等御会議相成、方

【154頁】

向一定の軍議予め御決定被成置候様との事
ニ御座候　右様御心得可被成候　恐惶謹言
四月十四日
毛利筑前
鈴尾五郎

御名

右の通御用状を以昨夜山口政事堂より到来
ニ付、写し拝見被仰付候　右ニ付ては今更
被仰聞迄も無之、銘々決死快戦の覚悟肝要
ニ候事

寅ノ四月十六日

毛利大膳家老
毛利宍戸備前
毛利筑前

＊廿一日期限　幕令による期限、左に記す

右の者共へ相達議有之候間広島表へ可差
出旨先達て相達置候処若病気とも押て来
二十一日迄に罷出候様可被申付候

『防長回天史』九三七頁下

＊方向一定　反対派（俗論派）を一掃し藩
戦を挙げて団結し幕軍四境に迫れば進んで
士民に出した布告

同（慶応二寅四月）十九日

一今朝邑政堂呼出ニ付　金子新蔵罷出候処、
田丹下方より別紙の通半間中へ相達候
様との儀ニて、早速及廻達候事

別紙左の通り
向後致脱走候者は乍御心外御古典も有之儀
ニ付、知行没収被仰付候　尚又党間敷儀
ハ当時勢殊更御手煩、第一威光ケ軽申蔑
ニ於、厳重ニ心得違無之様相慎可被
筋ニ付、
候事

【155頁】

同（慶応二寅四月）廿日

一御軍政方より別紙袖印雛形、半間中え相達候様との儀ニ付、早速及廻遂候事

付り 雛形の儀ハ廻文え相添置候事 諸士一統の雛形左の通り

竪五寸

横三寸

長須佐藩 何条何某

右白絹地の事、此外爰ニ略ス

月番 俣賀多禄・金子新蔵

慶応弐寅五月十二日

一只今御用の儀有之候条邑政堂罷出候様申来候ニ付大谷小源治罷出候処、益田丹下方より別紙通り半（間）中え相達候様との儀ニ付、早速及廻達候事

一思召の旨有之、御家来中勤功詮儀可被仰付候、銘々御役所勤の次第・年月等委細付出シ被仰付候条、来ル七月中を限り月番々々取縮可被差出候事

付り 本人嫡子隠居共身柄の御奉公筋付出シ、已前の分は不及其儀候事 寅ノ五月

一時勢切追ニ付ては一小隊二砲門田万出張追々交代被仰付、然ル処出張前廉両親間大壮（相、層）の病気ニテ難差置部有之候節は、其御趣御軍政方へ届出相成候ハ、御詮義の上御差操可被仰付候 尤右出張中又は相図ニて相（惣）出張の節は不被及御沙汰候事

寅ノ五月 月番 吉賀徳三・大谷小源治

【156頁】

慶応二寅六月七日

一御用の儀有之候付御軍政方罷出候様との儀ニ付栗山半左衛門罷出候処、益田邦衛方より別紙の通授有之候ニ付、両通ニシテ廻達致仕出候事

別紙左の通り

今般御幕御不如意ニ付、御家来中持合有之面々御借上被仰付候付、品々御武具方え差出候様被仰付候事

付り 諸司令其外役付の部ハ不及其儀、自分々々其出張場等え相用候様被仰付候事

寅六月

同十四日

一御軍政方へ呼出ニて益田邦衛方より授の趣は、明日惣出張被仰付との御事此段半間中え相達候様、猶又趣ニ寄相図をも被仰付候儀も可有之哉、於此儀ハ未相決不申との事授有之候付、早速及廻達候事

＊惣出張 石州口へ出兵

同十八日

一今朝邑政堂呼出有之別紙の通り半間中へ相達候様との事ニ付、早速及廻達候事

別紙左の通

今般旦那様御出陣ニ付、御武運御長久尚御供中無難の御祈祷、今日より二夜三日の間於白山宮自力を以執行仕度段、松永殿儀より願出被差免候 此段為心得内意相達候事

六月十八日

＊四境戦争始まる 六月 七日 十三日 十六日 大島口 芸州口 石州口

【157頁】

八月　十七日　門司、田ノ浦　終息

『はたがさこ』にいう六月四境役に山口兵本村通過、一隊は喜時雨、虹ケ谷から青原へ、一隊は戸谷口から木部へ何れも津和野三本松城を迂回する。と

同（慶応二寅六月）廿六日

一今朝邑政堂呼出ニて、別紙の通半間中へ相達候様との儀ニ付、早速及廻達候事

別紙左の通

此度の洪水ニ付、御家来中末々ニ至迄居宅土蔵駄屋等流失、或ハ破損潰れ又怪我人等有之候ハ、委細の儀早速付出被仰付候事

寅六月

同（慶応二寅六月）廿七日

一邑政堂呼出有之、別紙の通り半間中へ相達候様との儀ニ付、早速及廻達候事

別紙左の通

御家来中本人十八歳迄ハ、幼少出米被召上来候処、御詮儀の趣有之、向後年令未満と免て被仰付候事

寅六月番

栗山半左衛門・増野太兵衛
俣賀多禄・吉賀直人

慶応二寅八月五日

一邑政堂呼出ニ付栗山半左衛門罷出候処、大田丹宮方より授の趣ハ、於公儀軍艦御買入ニ付銘々心懸次第致出銀候様との儀ニ付、早速及廻達候事

付り　御買入の次第別紙ニ委細相見候ニ付

【158頁】

略ス

同（慶応二寅八月）十一日

一邑政堂呼出ニて別紙を以授有之候ニ付、早速及廻達候事

別紙

一御家来中諸願書を始届出事其外惣て役向へ相拘り候儀は、内談と候ても当役中出勤中邑政堂罷出申出候様、下宿後於下ハ御用筋一向ニ取扱被差留候　就ては役向付候事

本文の通被仰付候ても、非常又ハ難

付り　差置儀は格別の事

付り　当役中付属の銘々、差向御用筋於宅申出候儀ハ不及用捨候事

右元治元子六月沙汰被仰付候処、心得違の向も有之ニ付、尚又去丑八月沙汰被仰付候事

一須佐諸役所休日、已来五・十の日ニ被仰付候間、諸願其外申出の儀、用捨可有之候事

付り　非常又ハ難差置願筋の儀ハ可為格別候事

右文久三亥三月沙汰被仰付候事
の廉追々沙汰被仰付候処、今以心得違
向も有之様相見候処、弥以最前被仰出候通
右の筋一向ニ受込不被仰付候
為於宅願書申出の筋一向ニ受込不被仰付候
心得内意相達候事
寅八月

同日

一御軍政方呼出別紙の通授有之候事

別紙

今般諸口既及戦争、御家来中、諸々出張被仰付候節、病気を以御断申出候部も間々有

【159頁】

之、究方被差出候処、不都合の儀も有之、甚以当節柄不勘弁の事ニ候向後右様の者心於有之ハ乍御心外減少石をも被仰付候間、心得違有之間敷候事

寅八月

同（慶応二寅八月）廿一日

一邑政堂呼出有之、別紙の通半間中へ相達候様との義ニ付、早速及廻達候事

別紙

先達て以来御家来惣出張被仰付ニ付ては、諸稽古延引相成居候処、来ル廿三日より是迄の通り日割り稽古被仰付候条、休足面々相励候様被仰付候事

寅八月

同廿八日

一邑政堂呼出ニて別紙の通授有之候付、早速及廻達候事

別紙

一来月朔日二日御霊社御祭事ニ付、当日御手組衆を以大隊運動被仰付候条、是迄致稽古候銘々無残、昼兵粮用意ニて朔日、尤雨天の節ハ二日白六ツ時迄ニ無遅刻館中へ揃候様被仰付候事

付り銃の儀ハ病気たり共小隊人数へ相頼候て、是非同朝差出シ候様被仰付候事

八月

月番　栗山半左衛門　保賀多禄

井上亀槌

慶応二寅九月廿二日

一邑政堂呼出ニて別紙を以授有之候ニ付、早速及廻達候事

別紙

軍艦御買入ニ付募金の儀、先達て一統え布

【160頁】

告被仰付候所、今以等閑の部も有之様相見へ候間、早々取調、来ル廿七日迄ニ何分共可被申出候事

付り本文の期限過キ候ては、受込ミ不被仰付候事

月番　増野弥一郎・大谷小源治

同年（慶応二）寅ノ十月十二日

一邑政堂呼出有之、別紙の通り半間中へ相達候様との儀ニ付、早速及廻達候事

別紙

左の通り

定例御家来へ御払の半紙、向後御仕入米御蔵和市を以、毎年直段定被仰付候事

付り黒保の儀は壱〆ニ付御払代銀拾五匁ニ直上り被仰付候事

右御詮儀の趣有之前断の通り被仰付候条、為心得内意相達候事

月番　栗山半左衛門・井上亀槌

＊和市　相場

同十八日

一邑政堂呼出有之、別紙の通り半間中へ相達シ候様との儀ニ付、早速及廻達候事

別紙

左の通り

今般石州出張ニ付ては御内輪御壱人の儀ニ候へ共、当時勢別而文武要務ニ候条、兼て日割稽古の前を以稽古相勤候様被仰出置候処、尽心得違有之様相聞、甚以不相済事候間、向後不心得の者於有之は、御目付方より御詮儀の上、急度被及御沙汰候事

付り在須佐の銘々病気支り等ハ日々頭取方へ可被相達候事

同廿三日

一邑政堂呼出有之、別紙の通り半間中へ早速及廻達候事

【161頁】

別紙左の通り
御家来中末々御預ケ山毛迄御売払の儀ニ付、
当三月御沙汰の趣も有之候処、其後形勢変
移ニ相成御払山望の者も少く、御売払の儀
未被相断候処、追々於下差聞の筋も有之候
様相聞へ、且自然御制道方不行届、却って
御□（不カ）杯の儀も可有之哉ニ付、下木採用の儀
は先行形の通り被仰付候事

付り
余□其外地□有之受□□の場所扣木
採用の節ハ行形の通り願出候ハヽ見分の
上何分の沙汰可被仰付候事

覚
一 松角　壱才ニ付銀三分
一 松板　壱枚ニ付銀壱匁壱分
一 松小割　一本ニ付銀六分
右於時御家中へ御払の材木、御詮議の趣
有之当月より前段の通り直上り被仰付候と
の授ニ付、早速及廻達候事

増野弥一郎・増野太兵衛

＊毛　生産品
＊行形　しきたり、ありきたり
＊才　材木の単位
一才は一四〇立方寸、一石は七二才

慶応二寅十二月七日
一 旦那様御事御用召ニて被遊御出山、過ル
四日御屋形御出伺被遊候処、御前被召出
御加判役御直ニ被蒙仰、御請御礼等被仰
上、万端御首尾克被成御座候段御到来有
之、依之旦那様え一格切の披露状を以御
歓申上候様ニとの儀ニ付、例の通非役半
間中よりの披露状致仕出候事

付り　文格の儀ハ古案ニ依相調候ニ付略之

【162頁】

同（慶応二寅十二月）十四日
公儀より、当年も三歩方の御返石被仰出候
処、御所帯向御差詰ニ付壱歩半の処、石州
出先の御軍費ニ御預り被成、残ル壱歩半方
の処御返石被仰付候段、別紙授ケ書を以沙
汰相成候ニ付、早速及廻達候事・
右邑政堂呼出ニ付大谷小源二罷出候処、暫
役入江忠左衛門方より授ケ相成候事

同廿二日
授ケ書左の通
定例御家来中へ御払の半紙、向後御仕入米
御蔵和市を以毎年直段定被仰付候段、当九
月内意達相成候処、当年の御仕入米穀高直
ニ付ては、世上売買の直段より余程高価ニ
相見、御払紙の御趣意も不相立事ニ付、格
別の御詮儀を以、明年の儀は一〆ニ付八〇
四拾目当りを以御払被仰付候　此段内意相
達候事

寅十二月

右の通授相成候付、早速及廻達候事

同晦日
一 邑政堂呼出ニて益田丹下方より、別紙半
間中へ相達候様との事ニ付、早速及廻達
候　尚又昨廿九日の夜中、松崎社於神前
不慮の儀有之、火難ニ相崇り候段大宮司
より申出候付、十組々々申合せ火用心念
入候様との事ニ付、其段をも早速及廻達
候事

別紙授書左の通
平日御家来中、御殿御式台よりの出入被差
留、三十畳敷前口より出入被仰付候　尤明
暮御祝詞其外廉有御帳等の節は、御式台の
出入可被差免候え共、敷石の上高足堅ク被
差留候　若不心得の者有之節は見咎被仰付

【163頁】

候事

寅十二月
月番　保賀多禄・大谷小源次

慶応三卯正月十二日

一此度山口御旅館御番勤の銘々、三拾日を
期限ニシテ出勤交代被仰付候との授ニ付、
早速及廻達候事

同十三日

一御軍政方より授の趣は、明拾四日より是
迄の通り日割の稽古被仰付候との儀ニ付、
早速及廻達候事
栗山半左衛門・増野弥一郎

慶応三卯正月十九日

一御家来中幼年の者、習字場波田与市宅御
借上ケの道理ニシテ与市見合せを以習字
被仰付、十五歳以下幼年の者彼方罷越、
習字可有之、尤右習字場ニ不限、於世上
も是迄の通り勝手次第ニ相学候様ニとの
授ニ付、早速及廻遣候事
栗山半左衛門・増野弥一郎

（慶応三卯ノ正月）

是迄平常の御触事有之節、市中は打廻り、
奥海辺は飛脚を以触達相成来候処、事務繁
多、当今の形勢ニ付ては、諸事質略簡便を
主とし候御詮儀の趣有之、向後御触達は
半間々々月番所ニおゐて写取、無遅滞順達
候様被仰付候　尤事柄緩急ニ依り是迄の通
触達被仰付儀も可有之候事
卯正月

（慶応三卯ノ正月）

御家来中末々地方町浦迄布告
開物の業を創め士壌の力を窮め穀類賃物を
豊饒ニし、人民蕃息せしむるわ天意を奉る

【164頁】

国家の常務に候　且亦洪水ニ付田畠破損不
毛の欠地を補わん為、江海山浴開作となす
べきの地理有之候は、研究の上御家来は不
能申地方町浦ニ至る迄願出候は、見分の上
地理の難易ニ随ひ鍬下年限并傍示物限等被
相定可被差免、年限相立候上田畠共新開の
並を以石盛被仰付、御家来の儀は追年願ニ
依り本知へも結込可被仰付候事
卯正月

＊蕃息
＊鍬下年限
＊傍示物限
＊本知結込

しげりふえる
新田開発による免租期間
水損等による免租の猶予期間
従来の知行に加える

（慶応三卯ノ正月）

御家来中えの布告

従来御所帯向御難渋の処、先年相模国御備
場御出張已来引続自他の御役、就中元治元
子ノ秋京師変動後、終ニ千秋遣憾の御大変
等度外の御費用打続候処、其時々公内借を
始種々御操巻キ、当座棚ヶ合を以御取続相
成候　其後一昨丑ノ春、御内輪御混雑の次
第、尚再討の形勢ニ付ては御不勝手の中よ
りも、北門御守衛の御重任難被黙視事ニ付
器械御買入其外御武備の一条莫大の御入費、
去夏ニ到り候ては賊軍弥相迫り惣出張より
石地の戦争不引続御人数被差出御軍費も不
容易儀、且不計も去六月の洪水ニて、御領
内田畠多分の破損不熟ニて大壮の御所務落
ニ相成、随て諸村の難渋等は難尽筆紙候
右廉々御物入の大略は今更布告被仰付候迄
も無之、一統見分荒前ニ候　然処当春ニ至
り諸押石御上納は荒目安壱万両余の御不足
ニ相見え、且公内借の御道付を始、御取渡
御日用等の御操出シ、更ニ御目途不相立、
必至の御差詰ニて此往御取続の程如何可有

【165頁】

之哉、乍恐御当家御浮沈の境とも可申、万
釣圧印御危急の御場合、被為於上候ても不
一方御憂慮被為在候　是以一朝一タニケ様
御差詰ニ立至り候次第ニても有之間敷、元
来量入為出の御目途不相立、限り有る御分
高を以　限り無き御費用ニ被供候故押詰、終
ニは□(必カ)至の御難渋ニも立至り候儀ニ付、此
度御英断を以旧来諸事の御行形も成丈ケ御
廃止御費御省略、上々様御取渡も諸向被相
減、非常の御改革を以御所帯御恢復の思召
被為在、屹度根ニ入詮儀被仰付候　於御家
来中も年来の困窮昨今の形勢ニ付ては一己
の覚悟打続渋キ出張被仰付、且下地持の銘々
は知行所難渋等内外の雑費余程の差詰ニて
も可有之、上下危難の場是迄も無疎事ニ候
へ共、尚亦銘々節倹を本とし御厄害ケ間敷
は不仕申出様、成丈ケ手談を尽し其期を取
凌キ、往々(さきざき)御奉公の覚悟肝要ニ被思召候
此段厚ク可被相心得候事

卯正月

＊棚ケ合　棚上げ、一時保留して解決処理をさきへのばす
＊北門　石州口のこと
＊所務　貢租
＊押石　毛上押さえ、つまみしらべ
＊万釣圧印　非常に重くのしかかる
＊量入為出　経済の原則

(慶応三卯ノ正月)

覚

一 公借
銀百八拾五貫百九拾弐匁
但、御引米借新古分嵩
四百六拾弐石九斗八升
此現米
百八拾五石壱斗九升弐合

【166頁】

但、前出の銀高上納御引米取達シ
相成候時は
内
七拾八石七斗〇六合六勺
但、高百石ニ付現米拾七石
掛り分高四百六拾弐石九斗八升え
当て御馳走出米の分引之
残り御手取石
百〇六石四斗八升五合四勺
目安
銀壱貫目ニ付現米五斗七升五合

先年已来の御引米借前書の辻ニ候処、米穀
高価の時節行形ニ被差置候ては眼前の御不
勝手ニ付、追々御取達シの詮儀被仰付候え
共、兼て御差詰の御所帯向当座の御操巻ニ
被追是迄被打過候処、只今の趣ニてはいつ
祐(こそ)御取達シの目途も不相立事ニ付、御詮儀
の上此度御家来中は不能申ニ、地方町浦の
者ニ至る迄右公借え対し、及出銀ニは前出
の割合を以て当秋より諸村の内え免を付、
手取ニ被仰付、元銀え加詰八朱利付ニシテ
年々の御蔵和市を以、元利納崩シ可被仰付
候のぞみの者有之候ハ、出銀高来ル三月
・中ニ申出、現銀の儀ハ六月限り差出候様被
仰付候　尤不野取の廉も有之候は御役所え
問出可有之事

卯正月

栗山半左衛門・増野弥一郎

＊＊辻　：のとおり
＊不野取　未だ収穫していない野取らずの意味　ふのとり、のとらず

【167頁】

（慶応三卯ノ正月）

右御詮議の趣有之、隊号被成御預り候事　干城隊

（慶応三卯ノ正月）

此度御仕法替ニ付、諸塾生入込定限被仰付候ニ付、右定限の外自力を以相願候者は支配々々を纏、明倫館頭人座え申出の由可被差免候事

但定限の内明キ有之次第出情（精）の部は御賄被立下候事

一倍臣（ママ）の儀は、一統自分賄ニ被仰付候尤抜群出情ニて追々御役ニ相立候者の儀は御詮議の上御賄被立下候事

卯正月

＊明倫館　藩校

（慶応三卯ノ正月）

此度明倫館諸芸（塾カ）御改正被仰付候就ては掛配右事沙放の気紛令り具の面々は不及申、惣の御目附中時々諸塾中のニ汰逸上分、二見、塾生尚散兵中隊人数を勤惰を相通付の惰屹度相ケ月括ケシテ取調被仰付候者右様は実否取紛は御目精通弱御等ニ月も不勤の者被仰付先年付共紛附々打知行御ニて二ケ月の被仰付候御懸無之可被方見士の道内の心預り者は被仰付候紛の過御り被仰付候ニ事

卯正月

＊散兵（撒兵）　洋式の歩兵また歩・騎・砲をいう

（慶応三卯ノ正月）

此度深キ思召の旨有之、剣槍師家流儀被成御願試合稽古合併被仰付、別段教授方助教被役差出、於本稽古場修業被仰付候事

右の通組支配中えも内意可被相触候事

【168頁】

卯正月廿一日

（慶応三卯ノ正月）

一鳴物音曲停止被仰付候え共、来月廿五日より不及其儀ニ候事右主上崩御ニ付御国中鳴物音曲其外慎の儀沙汰被仰付置候処、物限前書の通被仰付候事

右の通組支配中えも可被相触候事

卯正月

（慶応三卯ノ二月）

当節世上自然痘令流行候趣ニ付、痘種萩より御取寄セ相成り候間、引痘未相済候者は、来ル十七日より中河原病院ニて引痘被仰付、尚痘種十分ニ相成り候上は是迄相済候者も再種仕候様被仰付候事

付り　々十七日後の引痘日は同日より八日目

付り　々兼々ニて御沙汰の通り引痘候者、植附弐百足よて銀壱両の謝儀病院え差出候様被仰付候事

卯二月八日

（慶応三卯ノ二月）

山口御番として出勤の面々、荷物送り方被仰付候通ニ付、是迄の通り不時急用召出の容易御費筋ニ付、是迄の外は荷送り不被仰付

右賃の銭被差下候事

此度の心得違ひの向も有之哉ニ相見候ニ付、改て沙汰被仰付候事

卯二月

＊費（ついえ）　費用、損害

（慶応三卯ノ二月）

一此度倉藩より使節差越、於小郡ニ応接被仰付候処、是迄見込違致後悔候段御末家并御家老中より書面差出、向後不御条理の出兵致間敷、此御方御国情貫徹候

授の覚

【169頁】

迄は企救郡御預ケ可仕段、書面も御取替
相成御懇親の御取結相成候事
右の通組支配中えも内意可被相触候事
卯二月

＊倉藩使節　四境の役に小倉藩が出兵し降伏調印まで六ケ月かかりその謝罪
＊企救郡　福岡県企救郡、六万石

（慶応三卯ノ二月）
石搗、木やり等ハ用捨被仰付置候処、今七
日より穏便ニ取扱の儀は不苦候　尤歌うた
ひ或はやしの儀ハ勿論堅被差留候事
右の通組支配中えも可被相触候事
卯二月

（慶応三卯ノ二月）
牛痘種付の儀ニ付てハ、先年厚キ思召を以
被仰出、御国中相広り小児生涯の一大厄相
免かれ候　然処当節自然痘頻ニ流行の由を
聞候処、於に今は引痘の儀容易ニ相心得、
引痘不仕輩自然痘感染仕候て、非命の死ニ
かゝり候者も有之哉ニ相聞、且引痘後自然
痘ニ再感する輩も有之候処、所謂変形痘と
申ものニて病症の順序も無之、死地ニ陥り
候もの多分無之由、於西洋ニも経年月の
内追々相開ケ、小児より中年到迄両三度程
付候儀も有之趣、右等の理無弁、引痘を無
益の様心得誹謗する輩も有之哉ニ相聞、億
万一右様の心得違の輩有之候てハ、折角難有
御主意筋徹底不仕、厚キ御仁政の旨忘却仕
候様ニて は不相済候処、向後心得違無之様
候様ニとの事
右の通組支配中えも内意可被相触候事
卯二月
右従公儀御触有之候ニ付及触候事
卯ノ二月

【170頁】
（慶応三卯ノ二月）
明十一日若旦那様其外上々様方御療養、且
御内用被為在、真の御忍ニて御出承御川屋
敷え被遊御滞留の段被仰出候　此段為心得
内意相達候事
卯ノ二月十日
宅野太郎・増野太兵衛

（慶応三卯ノ二月）
今般、剣槍の諸流儀被成御預、合併稽古被
仰付候処、少壮の者励とも可相成ニ付、老
年の面々たり共稽古場罷出、是迄の通り致
引立候様被仰付候事
卯二月

（慶応三卯ノ二月）
御両殿様御事、暫時の内山口表被遊御滞在
候段、去々丑ノ六月布告被仰付置候処、去
夏戦争已来不容易形勢押移り、弥以御武備
御更張無之ては不相済事ニ付、去亥ノ八月
御意書を以被仰聞候通り、往々山口え被遊
御座候所　爰思召御決定被為在候事
右の通り組支配中えも可相触候事
卯二月

＊更張　今迄ゆるんでいたものを緊縮する　改革

（慶応三卯ノ二月）
去寅ノ九月幕府従御所被仰出候趣も有之、
暫時兵事見合セ相成候処、此度御国表ニ付
一同解兵可致旨被仰出候由ニ候え共、上国
向新聞ニては彼是漸不容易時躰ニ可押移哉
ニ相聞え、又々何時如何様の御艱難ニ可有
之候も難斗ニ付、追々被仰出の通り弥以兵
備御更張御武威相輝キ御国躰相立候様無之
ては不相済事ニ付、銘々覚悟肝要ニ候事
右の通組支配中えも前儀内意相達し候事
卯二月

【171頁】

(慶応三卯ノ二月)

石州表被差出候面々、津和野御領内通行の
節勝手ニ宿駕籠差出させ令通行候者も有之
哉ニ相聞候　駕籠の儀は地下人御歴々の御
趣意を以、御国内ニても印鑑詰に被仰付候
程の儀、況して御隣国御交誼も有之、彼御
領地下人及難渋候ては甚以不相済事ニ付、
向後宿駕籠は勿論諸事地下の妨ニ不相成様
精々心を用ゆへく候事
一　同断、御国内人夫奉書を以津和野御領内
人夫差出させ候者も有之哉ニ相聞、甚以
如何敷事ニ候　向後右様の儀於有之は屹
度可被及御沙汰候事
右津和野の儀は、積年御隣国の御交誼御手
厚被為在候処、近来彼御領内通行繁々ニて
地下人容易ならず及迷惑可申、通行の面々
無沙汰有之候ては甚以不相済事ニ付、銘々
礼譲を守り纔ニても御彼方様御厄害ニ不相
成候様心得方勿論の事ニ候　万一不心得の
者於有之は屹度御咎被仰付候条、此段内意
相達候事
右の通組支配中えも可被相触候事
卯正月
別紙の通、従公儀御触有之候ニ付及触候事
卯ノ二月

＊印鑑詰　印鑑限り
＊奉書　上意を奉じて下に下知する文書

【172頁】

＊以下親書・令文・老臣副書は『防長回天史』一二一五頁と字句の違う所がある

(慶応三卯二月)

(親書)
文武の修業は奉公の根本といゑとも、修業
方、方向不定しては其才識適当の用成り難
く、依て此度諸芸(塾)仕法改正申付候間、孰も
時勢を弁へ勉励肝要の事ニ候　委細は年寄
共より可申聞候事
右御直書の写し

(令文)
干城隊の儀は、去ル丑ノ春御詮儀の趣有之
取立被仰付候以来、御家来中一統令入隊、
右隊中諸司令其外衝撃・誥(浩)武・精鋭・集英、
鐘秀・酬恩隊等孰も一致奮励、去夏令防戦
屹度御用ニ相立御満足ニ被思召候　然処最
前御家来中悉く干城隊の士と被為成度思召
の旨候処、今般御趣意筋凛然相立候儀ニ付
隊号被差除候え共、愈以一致令混和、於遂
御奉公は、別而御本懐可被思召候条、此段
各より申聞候様被仰付候事

(老臣副書)
文武の修業は諸士として可相励は勿論ニ候
処、多分本主意を失ひ空論末技ニ渉り易く
候ニ付、大器成就無覚束、間々中才已上ニ
ても私論を立、公義を害し候様の儀も有之
候　其内文学は流弊を矯、明義理と増知識
と修身治国の実学ニ復し候様有之度、到武
芸候ては今般御軍政御改正　火技専要ニ被仰
付候事ニ候えは、器械使用の術・兵卒進退
聚散の法并地理遠近広狭の算等深く研究不
仕ては自然及一敗候えは、受禍候事尤も甚
敷、得勝利候とも味方の損害を不免、所謂

【173頁】

死士器術十数ニ闘
生官地研開隊一は
地壱の相令はの人人戦却の
存途究隊無員の場而役小
亡勢候古ニ必制夫
の力法儀用取々て
道知略実の職司
実一要不て
に以緊制務を
任其変の了と有
事極し事知相之
ニ務ニ押仕成
到て候り古伍
火り候昔嚮
然器は処初導
間ニ戦ニ、、貴
火の四乏銃の
、迄学砲各

方今無の向の之銃不時儀砲相勢は戦定別不の故而心大ニ不付関候相候係　済も有向事の之後ニもて兵て有不学、之学文畢哉し学竟ニて を修相可（さしおくべきこと）以業聞閣事諸方、当ニ士、当

歩学旨遂上御右付素迄の尤騎落候令はニ日付不兵にの兵科候御中家の候よは事文兵と儀兼勿おの歩修学し本塾塾事奉下来通事り三ニ学はしニ学論ゐ技兵業校て職

を右学兵校学と校唱と来唱候替え被共仰、付以候来事名　称但不是混迄

公等中、候のの文様差着学被別眼兵仰有一学付之途を候候ニ士　え帰道此共しの段、、大各各其綱よ一材と り器識被可令ニ相申成因定聞就り、

是兵付は専て付、、て芸塾者御不と迄塾、素ら、、砲実諸小入無興可可の入仮読斥以砲術地士隊込之隆偏相通込令よ候後兵は対の入の様被廃心り被歩り学は塾究敵本相者厳仰の得相差兵始を兵規理の職調は重付御候心留運、令学則多司勉、、御、旨得候動幼修砲第端令励九凡引諸趣就、　相年業術一且得明十九立士をて令剣調中候兼期用勝義日十被と以は修槍候よ様学相兵免理後日仰し、文業等とり被セ調術害増はニ付て文学候のも修仰し候相候知文限候両学兵様技十業付むを備様識武り　道校学被芸六第候へ一り専候学六右相同両仰は歳一　く段居一事校十ニ兼様論（輪）

【174頁】

清候様歩兵塾と相唱可申候事
右の通り従公儀御触有之候ニ付及触候事
卯二月

＊押伍（押後）・嚮導　中堅幹部のこと。
＊古昔所貴の各闘（古昔初期の格闘）名乗りをあげての一対一の闘い　とする、案内する、せんだち
＊不可偏廃　不可は禁止の語、一方を捨てることは宜敷ない

（慶応三卯二月）

何主師少後細の海を天長共人奉壮の被心内も朝防奉父恐の御為事一不幕士恐子入者沙知は致顧府民入一候主汰召、生、忠一候円始人ニ分追民御敬統次承末父疑候々塗旨の泣第知ニ子惑処勅炭意道血ニ不立のを、諚ニを相奉付仕至主生闔台不奉尽歎、儀候意し国諭苦し度願早ニ族筋候感の候粉、候速はもニ哉奮旨様骨身（※）夫御有違、のも仕奔家々座之背過余被度走の処候、しルり為とを困置え就、子乍在の遂苦申共て於ノ恐、無ケ艱付、は京秋其巨他、難

【175頁】

出天と有第感性被よ畢巨御、幕奉奉等奮質成り竟細諚主の待存、のよ下奉於被の人御候、無余り候恐京為筋父耳処不遺りしへ入師聞相子目、遠漏確て共候の召立のと丑御被守、、次一届候誠しノ寛為ニ勅海第条、処意て冬大知過諚隅ニ形速、よ御ニの召候台辺候跡ニ惣り下至御被心諭僻えを御督私向再沙下底のの共以解府共、大汰候よ旨国、論兵尾一家小被御りを柄其シ被州統老監仰事差重頑情候仰前（ママ）臣の察出と起し固実へ出子者御候一り、愚御は候大納言様の被役御統候誠直酌、も、分召々事難次心の量素

老留等儀御苦御御闔家仰不所と無
中を仕ニ思し軍願国老出計置の余
松始`は召み勢申疑の`も筋御儀
平御且御と候被出惑者主昨被事実
伯所御座も次差候不え人寅仰ニ惰
耆置役候不第向え一はよノ出付迄
守振々え被`領共形不り夏候`、`
様奉方共奉乍内`候被右ニ御此無
え伺様`考恐御分付仰一至事上残
御度御不`聖侵毫`達途り而は被
拘所轅得就天掠も其`と闔已最為
留存門止て子無不砌却し国一早聞
のニ罷聊は平辜被追而て意統平召
家罷出カ素昔の聞々御差外奉常`
老在`防よ聖人召情拘出の渇御巨
被候名扞り明民分実留置御望寛細
召処代の不仁塗`をと候達居典御
出`御方相慈炭俄尽相名面候の承
`御拘便好のニニし成代被処御知
、

巨細の情実御聞届をも被成下、其後幕府御
ニ止安時仰は召内
御最堵御出今の命
座前不思候以程を
候の仕召え為を以
場候ニ共何も勝安
然所付も暫御入安房
処ニ`無時沙々房守
七て其之御汰被守
月其後急見も仰殿
将後尊襲合無聞態
軍の藩等せ御候々
御御様出と座処被
薨沙迄来の`、`差
去汰申も御折其下
被奉出難事柄辺`
為待置測ニ御の鄭
成上`、`付休御生（重カ）、御思
候候不闔`兵筋
由事得国何被相

而哀処被被意一寛し殊不不
悲訴`為為は々仁く更豫一
嘆歎恐在知申御大奉驚`形奉
罷願多候召上親度考愕遂驚
在可も御分候歴の候悲ニ驚
候仕今様`迄被叡ニ嘆崩気（嘆）
処手日子速も為慮`恐御罷在候処、至
`段の窃ニ無遊を先惶被臘末乍恐主上御
当も御ニ御之候被帝罷為
節有様奉寛闔御為聖在遊
新之子伝典国事廻明候候
天間奉聞被臣ニ`仁次御
子敷伺`仰子付最慈第様
御歎候難出無`前のニ子
践とて有候余主よ御奉奉伺
祚`は奉御儀人り質存候候て
`闔`存思`父のを候
国此居召巨子次以`恭は
別余候も細の第
誠
加之

【176頁】

分難衷且膏寛沛仁将
被有も海雨大然の軍
下感相内同のの叡御
候泣届一様御御慮宣
様可候致於沙思ニ下
泣仕而生主汰沢被も
血候已民人筋奉為被
再間な塗父被蒙基為
拝`ら炭子仰候候在
奉何すニ最出様て候
歎卒`不前被被`由
願此闔苦よ下為於`
候段国候り候成長就
程士様忠え`防て
克民仕敬は速君ハ
被一度の`ニ臣先
為統と誠大平も帝
聞別の意旱常何御
召而鄙`の御卒寛

激切屏切惶懼無已
長防士民中

覚（老臣の書）
今
般、
朝
廷
御
初
政
綱
紀
御
維
新
の
時
相
成、、
就
共て
ニは
お国
い内
て士
も民
同共
様よ
日り
夜別
希紙
望の
の通
罷歎
居の
、願
毎申
々出
御、
手私

情数
相
実至
御懸
様
願
奉
酌
恐
頼
奉
取
謝
存
候
被
の
成
至
下
御
此
座
段
、
宜
候
様
え
御
共
、
取
臣
計
子
の
不
程
一
得
上
被
統
止
下
不
の
候堪
様
奉
候
上
御名
安
芸
守
家老中

＊＊泣血歎願書
闔国全国
＊＊防長回天史第五編下（九）241頁以下参照
＊＊平昔
＊＊防扞
＊＊輟門
＊＊臘末
＊＊沛然
大旱の
膏雨降る
盛大な
臘は十二月を
陣営のぎ
門こばむ
ふ平生ここにおなじ、つねづね、ふだん
せこにおは防長二国のこと
ふだん
大旱の時によい雨がおひでりの時におさまる
＊御名
＊安芸守
書正式の文書にはここに毛利大膳と
か松平安芸守（芸州浅野茂長）
れる

【177頁】

諸士中本人戦争の節、令戦死又は被手疵療治保養中令死亡候て、跡職幼少の面々格別の御詮儀を以御役歳罷来候迄は、万一不幸に中令死亡候部は、本人の面々万一不幸に被仰付候事、尚幼少出米とも御免被仰付候事、御仕法御免幸し令病死候共、右嫡子死亡当日より期一同嫡子戦争の節、令戦死又は被手疵療治

日迄は各（格）別の御詮儀を以、末期減知の御仕法御免被仰付候事

右の通り組支配中へも可被相触候事

卯二月

＊跡職（跡式、跡敷）跡目、先代の家督を継ぐこと　防長回天史第五編下（九）249頁参照

（慶応三卯二月）

去夏戦争以来、海岸最寄の地より猥ニ他国探索と称し罷越候者も有之哉ニ聞不謂事ニ候　他国往来の儀は兼て厳重ニ御相被及御沙汰候事　向後不心得の者於有之は、屹度可被

卯二月

（慶応三卯三月）

旧臘、先帝崩御候付非常の大赦被仰付候依之是迄主家々々手元ニて罪科申付置候者共差障無之は、相応の宥免申付候様被仰付候事

卯二月

右の通従公儀御触有之候ニ付及触候事

卯三月

【178頁】

（慶応三卯三月）

光寿院様御弐百五十廻御忌、明十八日御相当の処、御取越、今日於心光寺御法事執行被仰付候、依之在須佐御家来中御香典寺納ニて参り懸り御焼香被仰付候事

卯三月十七日

右の通只今申来候付差廻申候間、草々御順達被成、廻り詰より各間へ被差返被下候

已上

三月十七日白九ッ時仕出

俣賀多禄・大谷小源次

＊光寿院　元亮室、光寿院芳林妙玉

＊取越　元和四・三・十八歿忌日を繰りあげ法事を行なうこと　またその法事をいう

（慶応三卯三月）

旦那様御事、昨十八日山口被遊御発駕、於萩当日御滞留、明後廿一日被遊御帰邑候　就ては此度の儀は、御家来中御道口不及御迎、尤被遊御帰館候上、御歓とシテ御用人座迄可被罷出候事

付り　若旦那様其外上々様御付々役座迄可被罷出候事

卯三月十九日

【179頁】

（慶応三卯四月）

今般思召の旨有之、向後左の通り被仰付候段被仰出候事、末期并病中仮養子共七歳未満一御家来中、尤重キ続柄有之断筋の者願出被差留候無余儀次第ニおゐてわ、七歳已下の者ニ御咎隠居の節も右ニ準候事付り願出不苦候事

一御家来中老幼共嗣子無之、及末期候節は一様ニ減少石被仰付候段古来よりの御作法の処、幼少の本人及末期減知被仰付候次第御定典と依之拾九歳已下の本人末期のの節は、別而御不便ニ被思召候格別の御憐愍を以減知の儀は御法姑クの御預り被仰付、弐拾歳已上の儀は乍御心外是迄の通り被仰付候事

一前断の通被仰付候御仁恵の旨容易相考、五拾歳已上ニも相成嗣子無之、及末期候節は御奉公の身分として不覚悟儀ニ付、法一等重ク減知可不被為得止、行形のと御一年被仰出候被仰付候趣ニ依りの候て近年被仰付候事通家名断絶をも可被仰付候事

一病者幼少の儀は、古来より御馳走米惣の当り成五朱増被召上候処、当今の形勢ニ相当り軍役専務の儀ニ付、御詮儀の趣有之惣の当り壱歩増被召上候事

卯四月

（慶応三卯四月）

年始其外破魔弓・年雛・床幡等取懸売買の儀、近年厳重御沙汰の趣も有之候えニ共、御売詮儀の趣有之、勿論最前の通り軽き所取懸売買不苦候事

但本文の通り取懸被仰付候ても、当節柄御謹慎中ニ付、颯々敷儀ハ兼て御沙汰の通り勿論の事

【180頁】

右の通当二月触沙汰被仰付候処、心得違の向もの有之哉ニ相聞へ、既ニ端午ニも差向候ニ付、幟建候儀被差留、惣て騒々ニ敷儀無之様ニ被仰付候、此段内意相達候事

一武器類他国売の儀は、去ル子ノ年厳重沙汰被仰付置候処、間々不心得の者有之、鉄砲・塩硝・鉛・其外など他国致候哉ニ相聞へ、甚以不謂事ニ候

向後右躰の者於洩聞は屹度可被相咎候

尤無拠儀□（有之）□候ハ、其趣委曲申出候上何分御差引可

一他国より物の仕入の儀は、追々御沙汰の趣も有之候処、頃日猥りニ長崎罷越仕入せしめ、殊ニ外国人より令直売買候族も有之候事

右の通り組支配中えも可被相触候事

四月廿七日

右従公儀御触有之候ニ付及触候事

四月廿九日

◎塩硝（焔硝）硝酸カリウム、チリ硝石に塩化カリウムを加え複分解する

$NaNO_3$ 十 KCl=KNO_3 十 $NaCl$

（慶応三卯五月）

市中本川筋は勿論小川小溝ニ至迄、去夏の洪水ニて小石砂等持込ミ余程埋り候様相見へ第一水は宜敷、随て其害少事ニ候、所最早来ル就て十五日限り居屋敷通り其外引受の場掘さ候様被仰付候

梅雨ニも差掛候儀ニ付、□（酒予カ）□有之間敷候期限ニ至り、年行司・□（御目カ）□附実地見分被仰付候事

付り 兼て御沙汰の通リ、川筋え猥ニ捨物

【181頁】

せしめ候不心得の者有之候ハ、、其場所引受の銘々無緩せ気を付見咎届出候ハ、可被及御沙汰候事

卯ノ五月

（慶応三卯五月）

此度御詮儀の趣有之、銃隊稽古の儀ハ已来外勢溜りニ被仰付候事

本文稽古日の儀は是迄の通三・八ニ付り

被仰付候　尤大隊調練の儀は別段被仰付候事

卯五月

（慶応三卯五月）

諸仰統事別の被業御引自被石勤
出稽粉一ニ部方の武方を仰然目受候
古骨小候隊右要凛・司都被候
旨御興　勉励も　宛依　合医令病仰
隆有之の　亦張此一之の　出シ　差届ニ候精`市の度廉`儀`寄之出出て様御日中心格の当は心り候`候出相引割御得別御今`得候ハ厳様勤励立稽家をの用の近違て、重被不可の古来以思ニ御年無は`ニ仰相申遵の中`召相時以之乍屹御付成候奉別一館を立勢追様御度取候部　御を統中以候御々可心御糺　は右趣以通入`様家厳被外咎の左`入意出ひ込御有来重致減方上候速込を勤稽稽手之中ニ精少可`はニ人`修古古組度一被

市中御家来中、日割別を以稽古被仰付り

付、若病気又は無拠差添等有之候節は、此趣ニ寄候

拾五才より四拾歳迄の士分`段委曲館

中御目代迄届出候様被仰付候

尤て細は本文の通屹度御取糺被仰付候

工人已下の儀は右届ニは及不申候

（慶応三卯五月）

日割左の通

雨天の節は日送りニ被仰付候事

四日　河原丁・横屋丁・中津丁

五日　中河原・浦西

六日　浦東・水海

七日　海蔵庵・田中・松原

八日　本町・山根丁・諸役人

右の通被仰出候事

卯ノ五月

＊馬場　松崎八幡宮向かって左側空き地、今広場になっている

＊＊仕調（しっらえ）　構え作る

＊＊鍬ふり　鍬（軽籠）もっこ

＊かるこ

【182頁】

共、不心得無之様厳重出勤被仰付候事

卯五月

（慶応三卯五月）

此度御霊社前え、御馬場仕調并往来仕直し

被仰付候ハ、、

町浦ニ付候　依之市中御家来中末々家中長屋

出当ニ至　迄`壱日宛御加勢被仰付候尤罷町

内ニ候て当日日割ニ被付条其節揃町、

於同所御申合せ儀は壱日御霊社前え相達面着え付可被申候事

作事方に相朝五ッ時御

一弁当銘々鍬ふりかるこ用意の事

一場始の儀は銘々便利次第の事

一調ら休等拍子の木節無図の事

何ら持運び礼の無事

念入可被申候事

之様、互ニ

（慶応三卯五月）

先日諸稽古御興隆の儀ニ付、市中御家来中

達割て別を以稽御目代`古迄届五才出候様被仰付候処`士

中拘差曲湊館中御節代`被仰付候のは無

分委有之御目代`十五才候様四拾歳迄の士

【183頁】

此度御詮議の趣も有之、十六歳より五拾歳迄の士分委曲届出候様、被仰付候事尤五拾歳已上の士共日割別を以、成丈ケ厳重致出勤候様被仰付候事

（諸役人日勤の面々ハ、兼て致達置、成丈ケハ御用差繰を以致出勤候様被仰付候尤其余臨時御用の部ハ時々致達候様被仰付候事）

卯五月

（慶応三卯五月）

（趣意書）

近来幕府相対朝廷、摂州兵庫開港の儀其外（奉）屡表裏の次第申上、人心益不服、皇国土崩瓦解の萌有之、終ニ外夷の術中ニ陥り候様ニ可立到、新帝御践祚の折柄実以不容易儀ニ付、薩土其外上京、朝威回復御名儀相立候ニは何等の事変相起り候哉

（以下は右趣意書に対する添書と思はれる）

（も難斗形勢ニ付、銘々）不覚悟無之様心得方肝要の事ニ候

積年の御誠意未御貫徹、到ら御国難ニ相成、幕府四辺襲来、御浮沈ニ到候就て御国家の開明を被為誓候一途ニ四方防禦春乍只管大雲霧界面無其於幕府御到来有之暮処ニ付応解痛歎思召恐御変ニ無其惰実府も被御喪被相済測ニ付旦暮御豈図早共ニ召出ニ不少は不被相相甚候候以処ニ一応ニ後諸達之候折共ニ不趣不相聞事兵の被有向益厳肝要ニ候

而於不心々得の粛

夜白海陸練兵等の引立無由断、尚頃日薩州（油）土州其外諸藩御上京朝威回復被成御尽力候ハ、て機依り如何様の変相起り候ハ、て時御諸藩共ニ襲来も可有之と形勢不難斗

【184頁】

容易趣報知有之、深ク御軫念被思召、臨機の御差図も可有之、間進退不覚悟無之様心得方の儀不及申、器械弾薬ニ到ル迄実地の用意可為勿論候事

本書二廉組支配中へも拝見被仰付候事

五月廿二日

右従公儀御触有之候付及触候事

卯五月

＊二十三日公（敬親）群臣を会して趣意書を示し警戒す、老臣副書してこれを敷桁す、要は上国の形勢測り難し宜しく変に応ずる備あるべしと云うにあり『防長回天史』（九）295頁

（慶応三卯五月）

旦那様、若旦那様御一同明後廿七日、萩通被遊御出山候此度の儀は御家来中御道口人え不及御送ニ、明廿六日御暇乞として御用座迄可被罷出候事

五月廿五日

御発駕後御用人座御裏老迄罷出、上々様方御歓可被申上候事

（慶応三卯五月）

御家来中末々地方町浦ニ至ル迄、盲人相居候者有之候ハ、名前年令付等出候様被仰事右御詮議の趣有之、早速早々申出候事

卯五月

（慶応三卯六月）

若旦那様御事、過ル四日於御屋形殿様御目

【185頁】

見の上御素読御試被遊御済、同七日於五十
鈴御殿若殿様御目見、御好ミニて大学論語
の内御上聴御都合能被為済御菓子御頂戴、
直様御表御殿ニて興丸様え御目見御菓子御
頂戴、万端御首尾能被遊御座候
猶又今十日山口被遊御発駕、萩ニて一日御
滞留、翌日宇田御泊り、来ル十三日被遊御
帰座候段御到来有之候　依之御家来中え御
知せ被仰付候事

付り　御着承り懸御用人座御裏老座罷出、若旦那様其外上々様方え御歓申上候様被仰付候事

六月十日

＊興丸　元徳の世子元昭、慶応元生まれ

（慶応三卯六月）

御家来中末ニ至迄、小々役目飯米溜り無之
様、其月末々々又ハ前月分翌月朔日迄ニ無
遅滞申出候様、過ル元治二丑ノ正月沙汰被
仰付候処、近来間々心得違の向も有之、年
中の分相縮メ一回申出候段は如何事ニ候
第一御勘定月々正、御詰の妨ニ相成候付、
向後厳重ニ申出候様被仰付候　自然等閑ニ
打過一ケ月限り申出不仕部は、飯米不被立
下候事

付り　本文の通月末申出候処、無余儀次第有之及延引候分格別の詮儀ニ被仰付候事

付り　当正月已来相滞り候部有之候ハヽ、当月限り相縮、委細付立を以申出候様被仰付候事

卯六月

（慶応三卯七月）

近来諸上納銀の内え正銭多分差出候処、文
銭え銅銭、々々え鉄銭の交り、且貫キの内

【186頁】

欠も有之、於引受役座取調も行届兼、縮ル
処欠損不少迷惑の趣ニ相聞へ候　元来上納、
銀は念を入、相改可差出段は勿論の儀ニ付
向後正銭令上納候節ハ廻し改にして、銅銭
取交せ又は欠等有之候儀ハ相償、且上納高
え当り弐分の返利被召上候条、能々取調上
納仕候様被仰付候事

付り　上納の正銭え欠数并姓名を記し夫々差札相整、差出候様被仰付候事

卯ノ七月

＊貫キ　銭の内側の四角い孔のこと

（慶応三卯八月）

来月朔日より二日笠松社御定祭ニ付、当年
も一昨丑年被仰出の前を以、御祭事被仰付
候　依之御家来中胴服小袴着用ニて、両日
間勝手次第参詣被仰付候事

付り　地方末々ニ至迄勝手次第参詣被仰付候、尚町向より寄進昇・提灯等勝手次第被仰付候事

一　御祭礼ニ付御名代の儀は、松崎宮御祭事
の形を以二日朝の内被仰付候事
一　同断ニ付、御家来中末々ニ至迄、御社え
提灯并懸行灯・昇の類寄進勝手次第被仰
付候事

付り　寄進の品御作事方見合被仰付候事

右一昨年笠松社御祭礼御定式ニ被仰付候え
共、猶又為心得及触候事

別紙
本書御定例の儀ニ付向後不及
触候間右様可被相心得候事

卯ノ八月

【187頁】

（慶応三卯八月）

（令文）

山口御輪曲
是唱御
処御共
候以
`
来今ニ混同御
般付雑様屋
城御
`の形
段永格折儀御
心二住別柄ニ曲
得ノ違御の厳ニ候輪
無曲儀重も処内
之輪被の有`の
様同仰御之只儀
`様出沙`今は
下の候汰且迄`
々心　も山は萩
ニ得就不口諸御
至勿て被御口城
迄論は仰滞戦二
手の諸付留争ノ
堅儀向候の彼御

右のニ外よ御但可
の印申向り門御被
通鑑達よ報切屋申
従を通り知手形聞
公以関罷をを御候
儀通被出シ以本事
御関仰候テ往門
触被付面罷来`
有仰`々出被夜
之付退は候仰中
候候去`か付は
ニ　の其其候締
付　節子の　切
及　は細外尤被
触　罷姓急使仰
候　出名御役付
事　候等用等`
役委ニ詰通
座細付所用

卯ノ八月

＊令文　『防長回天史』（九）389頁

（慶応三卯□月）

旦那様御事`先達て已來少々御機嫌相ニ付
保養と し て 御 暇 の 儀 仰 願 `昨 朔 日 山 口
遊被御遊御発駕`同晩萩御川屋敷御着`今日被
御帰御座候中御段只今御到来有之候御度の帰館
遊御家来座候道口不及迎尤被遊此儀
候御歓と中御用人座迄可被罷出候事
上御と し て 御 口 用 人 及 御 来 有 之 候 被 帰 被
御付々の役座迄可被罷出候事
若旦那様其外上々様方へ御歓として付り

卯□月

（慶応三卯八月）

授の覚

是迄御所帯御難渋の処`過ル子ノ年より
戦別而非常の臨時御費用嵩ミ代`子の且昨年水年等石`地は
争以来の出兵`御尚又去相夏稀洪

【188頁】

廉相
い密ル省恐御成々
て諸処略入危`莫
は向御を候急此大
此取所も　の往の
時締帯被已御キ御
の購恢仰ニ場御入
儀財復付当合取費
御のは候春ニ続ニ
家実今大以立のて
来効日略来至御終
中相のは諸り目ニ
末挙急承廉夜途必
々候務知御白も至
ニ様ニの改被相の
至被付前革遊立御
ル仰`ニ`御兼差
迄付猶候冗心`詰
``又　費労実ニ

就厳然御奉以
臣
分
の
情
実
に
お
い
て
諦（傍カ）観ニ打過候者も有之
間
敷
候
共
`
の
深
慮
の
旨
も
有
之
広
く
御
下
問
被
思
`
召
御
候
深
慮
の
旨
も
有
之
広
く
御
下
問
成
令
立
為
敷
在
候
共
`
の
深
慮
の
旨
も
有
之
広
く
御
下
問
縦
忌
の
在
候
共
`
の
深
慮
の
旨
も
有
之
広
く
御
下
問
蔵
諱
儀
度
え
共
`
の
深
慮
の
旨
も
有
之
広
く
御
下
問
出
献
ニ
ニ
被
思
`
召
御
候
深
慮
の
旨
も
有
之
広
く
御
下
問
献
令
立
為
敷
在
候
共
`
の
深
慮
の
旨
も
有
之
広
く
御
下
問
候
言
忌
の
在
候
共
`
の
深
慮
の
旨
も
有
之
広
く
御
下
問
様
仕
諱
儀
度
え
共
`
の
深
慮
の
旨
も
有
之
広
く
御
下
問
被
`
ニ
ニ
被
思
`
召
御
候
深
慮
の
旨
も
有
之
広
く
御
下
問
仰
印
触
付
思
`
召
御
候
深
慮
の
旨
も
有
之
広
く
御
下
問
付
封
候
`
事
各
候
深
慮
の
旨
も
有
之
広
く
御
下
問
候
ニ
事
件
見
間
慮
の
旨
も
有
之
広
く
御
下
問
事
し
た
込
`
の
御
所
帯
恢
復
并
地
下
向
問
て
た
り
の
御
筋
帯
恢
復
并
地
下
向
問
姓
名
共
筋
所
帯
恢
復
并
地
下
向
問
名
を
不
も
有
之
広
く
御
下
問
記
及
用
之
捨
候
ハ
`
無
包
邑
政
`
堂
え

卯八月

＊取続　家の成り立ち

（慶応三卯七月）

覚

一　献上御久米
但、壱枚ニ付十六文ツ、
一　御久米
但、壱枚ニ付八文ツ、

右松崎宮八月御祭礼ニ付`御久米御初穂相
定申候□□近年ハ紙類余り高直相成候故
無余儀申上候間何角よろしく御頼仕候　已上

七月廿二日

大宮司

【189頁】

（慶応三卯八月）

諸稽古日割規則

来九月朔日より

諸稽古定日

十二日　文学・槍術

廿二日

十三日　高島流

廿三日

同

但終日稽古定日

右終日稽古の節弁当用意、尤無給御家人・農町兵の部えは昼一飯被立下候事

十四日　剣術・馬術・抜刀

廿四日

十八日　高島流

廿八日

十九日　高島流・馬術　剣術・馬術

一ノ日〆十四日

五ノ日

六ノ日

七ノ日

十ノ日

廿九日〆十六日　休日

内廿九日　高島流、但増稽古定日

右増稽古日の儀は、諸稽古定日の内一日不勤の部は半日、二日不勤の部は終日出勤被

【190頁】

仰付候尤三日已上不勤の部は、於に時不足の日数丈ケ、自力を以入込被仰付候事

付り　日ニ終日稽古日ニ出勤無之部は、増稽古共ニ出勤無之部は、追而入込ミ被仰付候事　尤右終日稽古、諸稽古皆勤の部は不及出勤候事

右の通稽古日割被仰付候事

右日割別を以出勤被仰付候事　在須佐諸士中

右日割別を以於村々稽古被仰付、尤日割の内十三日、其外高島流一日、剣術一日育英館え出勤被仰付候其余日数たりとも成丈ケ育英館致出勤候様被仰付候事　在郷諸士中

高島流　剣術　〆五日

月二三日宛　御手組在須佐寺院中

月二二日宛

其余寸暇を以間稽古被仰付候事

其余稽古心掛ケ次第

右日割別の内十三日、其余日割別の内出勤被仰付候事

右同断　御手組社家中

右同断　在須佐御細工人中　同御船頭中　同三固屋御中間中

【191頁】

高島流剣術

其余稽古の儀は心掛ケ次第

月二三日宛　在郷寺院中
月二二日宛

右日割別を以於村々稽古被仰付候尤日割の内十三日、高島流一日、剣術一日育英館致出勤、其余日数たりとも成丈ケ育英館え出勤候様被仰付候事

付り寸暇を以間稽古被仰付候事

右同断

在郷社家中

右同断

同御細工人中
同三箇屋御中間中

高島流

其余稽古の儀は心掛ケ次第

在須佐御手組入諸家中家来中
同　無給御家人中
月二三日宛

右日割別の内十三日、其余日割別の内出勤被仰付候事

付り家業間合を以間稽古被仰付候尤夜中蝋燭被立下候事

高島流

在郷御手組入の諸家中家来中
同　無給御家人中
月二三日宛
七ケ村庄屋中

其の余稽古心掛ケ次第

右日割別を以於村々出勤被仰付候尤右日割の内高島流一日育英館え致出勤、其余成丈ケ育英館え致出勤候様被仰付候事

付り家業間合を以間稽古同断

【192頁】

高島流

御手組入の町兵中
月二二日宛

右日割別を以育英館令出勤候様被仰付候事

付り朝夕家業の寸暇を以、間稽古被仰付候尤夜中蝋燭被立下候事

高島流

御手組入の農兵中

其余稽古心掛ケ次第

右日割別内を以、村々ニおゐて稽古被仰付候時ニおゐて育英館被召出、尤心掛ケ次第育英館え致出勤候様被仰付候事

付り朝夕農業の寸暇を以、間稽古被仰付候夜中蝋燭被立下候事

右此度思召の旨を以、是迄御手組の入塾当分被成御引せ、右日割別を以厳重ニ通ひ稽古被仰付候尤稽古不練并小隊入不相済、猶日割稽古不勤の部えはいづれも時々入塾被仰付候猶亦右日割稽古の外於に時大隊調練被仰付候事

付り病気差添の節は是迄の通厳重ニ日々達シ被仰付候事尤寺社家其外御船頭御細工人已下の部は日々の達シニおよバず、御定メ日の数何日と申渡、月末ニ司令士迄相達シ司令士より稽古掛り迄相達シ被仰付候事

卯八月

【193頁】

（慶応三卯八月）

大鳥鉄砲向節鹿英稽洩
鳥早御渡古聞被
狩館
、星場、時留渡制候
打候差
兎
狩の試は侯候禁時
の外打、条故被節
儀一等一、、仰ニ
は向の簾若当付付
行被差御不月候、
形差問咎心よ　例
の留可可得り然年
通候有被ニ来ルの
可　之仰て三処通
被　事付鉄月当九
相　ニ候砲迄年月
心　候　取鉄の朔
得　条然悩砲儀日
候　、上候打はよ
事　育は段一時り

＊大鳥　船木宰判の例によると大鳥（鶴）とある『防長歴史用語辞典』二四六頁下
＊悩　自己の行為
＊星場　（星台）観測場、ここでは的場カ

は本書紙ニ稽古打、遠町試験等於館外放発の儀
其時々邑政堂え届出可有之候事
卯八月

（慶応三卯八月）

墨隅信有像付取候届お右ニ外候
隅の神道族唱奇怪然可之相祝蠱惑
信仰もと見はもと不有当人物て
仰の諸、のて無、、当懸候の政
来於教末邪多之糺政人部方事
ル有限々教人物部方事の見
二之らニ御数も未堂儀当不有
十はず至国妖有行申は次可
五ず乞内教之届出重第
日度意乞えへ候向候く郡事ニの
を可の度令信　も様可のニ
限被祝相伝従然可、被於付聞ニ
り相を心入しル有当相御、、
政咎唱得候不処之五咎代詮
事候候可て穏近哉月候官儀国
堂事衆申は趣比、布ニ所の内し
へ　、候不相長今告付焼上右め、
申　令　相聞崎以被、捨墨等、
出　誘其済候辺有仰厳被隅の間
候　導外事　に無付重仰画儀々
様

（慶応三卯八月）

右の通組支配中えも内意達シ被仰付候事

被仰付候事

【194頁】

＊墨隅　神道十三派のうち黒住教カ
黒住宗忠（江戸末期の神道家）開く
明治十五年黒住教と称す
＊祝（のりと）　のりと
＊郡代官所　奥阿武宰判代官所は吉部（現、むつみ村吉部）にあった

（慶応三卯八月）

一覚
免手形壱通
但当卯ノ年分白紙当嶋定御扶持免米
壱石壱斗七升の分

右致所持ニ候付調於家内紛失、種々尾崎良度尋候共
相知不申了簡を以変の儀願出付候候依最前過料免被
右召上ニ候ハ差留候被支配中、えも早速支若配方候事
候手形通有之用候ハ者組支配中、えも早速支若配方候事
者形通有之用候ハ者組支配中、えも早速支若配方候事
右の通従公儀御触有之候ニ付及触候事
卯八月

（慶応三卯八月）

右去夏の洪水公儀御領分多の夫飯米御貸渡の儀、於御米方受方可有之候事
シ右夏の洪水公儀御領分多の夫飯米御貸渡の儀、於御米方受方可有之候事
去夏の洪水公儀御領分多の夫飯米御貸渡の儀、於御米方受方可有之候事
右夏の洪水公儀御領分多の夫飯米御貸渡の儀、於御米方受方可有之候事
夏の洪水公儀御領分多の夫飯米御貸渡の儀、於御米方受方可有之候事
の洪水公儀御領分多の夫飯米御貸渡の儀、於御米方受方可有之候事
洪水公儀御領分多の夫飯米御貸渡の儀、於御米方受方可有之候事
水公儀御領分多の夫飯米御貸渡の儀、於御米方受方可有之候事
公儀御領分多の夫飯米御貸渡の儀、於御米方受方可有之候事
儀御領分多の夫飯米御貸渡の儀、於御米方受方可有之候事
御領分多の夫飯米御貸渡の儀、於御米方受方可有之候事
領分多の夫飯米御貸渡の儀、於御米方受方可有之候事
分多の夫飯米御貸渡の儀、於御米方受方可有之候事
多の夫飯米御貸渡の儀、於御米方受方可有之候事
の夫飯米御貸渡の儀、於御米方受方可有之候事
夫飯米御貸渡の儀、於御米方受方可有之候事
飯米御貸渡の儀、於御米方受方可有之候事
米御貸渡の儀、於御米方受方可有之候事
御貸渡の儀、於御米方受方可有之候事
渡の儀、於御米方受方可有之候事
の儀、於御米方受方可有之候事
儀、於御米方受方可有之候事
於御米方受方可有之候事
御米方受方可有之候事
方受方可有之候事
受方可有之候事
方可有之候事
可有之候事
有之候事
之候事
候事
事

（慶応三卯八月）

心得候事
卯下秋石よ
以被仰り
大壮仰取
の御従候立
公儀の沙公儀汰御段の
儀、汰御段の
御儀、汰御段の
儀、汰御段の
、汰御段の
汰御段の
御段の
段の
の
右夏の洪水公儀御領分多の夫飯米御貸渡の儀、於御米方受方可有之候事
夏の洪水公儀御領分多の夫飯米御貸渡の儀、於御米方受方可有之候事
の洪水公儀御領分多の夫飯米御貸渡の儀、於御米方受方可有之候事
洪水公儀御領分多の夫飯米御貸渡の儀、於御米方受方可有之候事
水公儀御領分多の夫飯米御貸渡の儀、於御米方受方可有之候事
公儀御領分多の夫飯米御貸渡の儀、於御米方受方可有之候事
儀御領分多の夫飯米御貸渡の儀、於御米方受方可有之候事
御領分多の夫飯米御貸渡の儀、於御米方受方可有之候事
領分多の夫飯米御貸渡の儀、於御米方受方可有之候事
分多の夫飯米御貸渡の儀、於御米方受方可有之候事
多の夫飯米御貸渡の儀、於御米方受方可有之候事
の夫飯米御貸渡の儀、於御米方受方可有之候事
夫飯米御貸渡の儀、於御米方受方可有之候事
飯米御貸渡の儀、於御米方受方可有之候事
米御貸渡の儀、於御米方受方可有之候事
御貸渡の儀、於御米方受方可有之候事
渡の儀、於御米方受方可有之候事
の儀、於御米方受方可有之候事
儀、於御米方受方可有之候事
於御米方受方可有之候事
御米方受方可有之候事
方受方可有之候事
受方可有之候事
方可有之候事
可有之候事
有之候事
之候事
候事
事

【195頁】

＊兵起（へいおこり）　前年（寅）の四境の役による手続きの遅延の為カ

＊夫飯米（ふはんまい）　人夫用飯米

（慶応三卯八月）

石州那珂郡上府ニて丶御神本大明神の御社
頽破相成候所丶当御難渋の中候え共行形被
差置候も御不本意の儀ニ付丶この度御旧式
ニ依り御再建被仰付度被思召候　就ては御
末家を始丶御志次第御合力の儀被仰達候
於御内輪も御血脈家筋の者は身分相応御加
勢申上候は丶御神慮ニも相叶候儀と被思召
候　志有之者ハ来月中を限り被願出候は可
被差免候事

卯八月

＊上府（かみこう）　益田氏の古地

＊合力　喜捨を乞う

（慶応三卯八月）

石地入込の儀ニ付ては丶追々厳重の御沙汰
の旨も有之候処丶近来帯刀の者猥りニ間道
より立入所々致俳徊候て□ならす隊中のも
のと号し丶威力を以無作法を所行せしめ候
者不少哉ニ相聞丶津和野御領も孕居候場所
旁第一御国辱ニも立至り丶甚以不相済事ニ
候　已来右等の者於有之は丶早速召捕候事
勿論の事候処丶万一手ニ余り候節は時機ニ
寄り討取ニても不苦候条丶此段為心得内意
達被仰付候事
右の通御国中惣触丶大森・浜田・益田三役
所并石地諸出張の面々は丶触御沙汰被仰付
侯事

津和野へ御達写

他国出行の儀は兼て厳重被申付置候所丶近
来隊中と偽り御領内丶尚石州他罷越丶種々
狂暴の所行せしめ候者共有之哉ニ相聞へ丶

【196頁】

甚以不謂儀ニ付丶弥厳重取〆方丶尚手ニ余
り候節は討捨候様石州出先えも被申付越候
ニ付丶万一右御躰の者御領内罷越候ハは丶
被召捕丶依時機御討捨相成候ても不苦候ニ
付丶印鑑所持不仕致通行候等の者丶無御容
赦御厳重御取調被下候様致御頼候事
右の通吉部御代官所より申来候ニ付丶為心
得及触候事

（慶応三卯八月）

近来茶器其外無用の珍物令流行丶いつとな
し驕奢の風習ニ押移り不相済事ニ付丶就中（とりわけ）
て画器物を致贋作丶人の目を惑し丶或は
売買躰の令取扱丶或は過当の利を貪り候
族も有之哉ニ相聞丶全以武士の本意を取失
ひ丶風俗を敗り候所行甚以不謂事ニ付丶已
来右躰の輩於有之は厳重御咎被仰付候事

卯八月

◎不謂事　いらざる事、よけいな事

監

（慶応三卯八月）

御詮儀の趣有之丶下横目の者御役羽織被相
改丶是迄の通黒色にして雛型の紋三ッ取附
割羽織着用被仰付候事
但九月九日より被相改候事

卯八月

＊下横目　横目付は武士の非道を弾劾する役目、下横目はこれに付随する

（慶応三卯八月）

御家来中并末々迄丶娘子供丶女工の専職ニ
侘屋をしめ候時丶鳴物音曲穏便に相用ひ候
儀は格別の事ニ付不苦候え共丶さらへ会杯

【197頁】

右の通公儀御触有之候ニ付及触候事

卯ノ八月

右此族に商移ニ取之付屹取と
の段於相売り沈用哉置度扱号
通改有聞人、溺ひニ候見のし
組て之、同甚せ、て処咎儀多
支内は甚様鋪し娘、、可は人
配意詮以のニめ子近御被、数
中被儀不所至、供来沙仰如集
え仰の謂行てい肝三汰付何会
も付上事仕はつ要味筋段に又
可候屹候、酒との線容、もは
被事度　不宴な産其易先不酒
相　可向埒席く業外に達憚宴
触　被後方ニ花意に音相て御席
候　及右のて怠曲心移時等
事　御等輩其のり弥得し相ニ
　沙不も芸風只増候を振て
　汰心不を習管盛向も舞颯
　候得少争に遊んも被ニ々
　　の趣ひ押楽に有仰付敷
　　、　　、

＊女工（女功、女紅）女子本来の仕事

＊＊侘屋（たくや）（宅屋）個人の家
＊花意↓花美↓華美

（慶応三卯九月）

（令文）

百以有海奉屡知差坂趣幕家従此
端朝之内平被の登難御府の御度
人命候和常仰趣御被達よ内所長
心をえ同の出ニ決為相り壱被防
不被共被御、就議成成御人仰の
伏矯更為沙於てニ、候達吉出儀
、、ニ、汰諸は御付処有川候、
時諸御奉被藩先座て、之監ニ早
勢藩採安仰も般候は孰候物付々
日の用宸出御従所御も付并、寛
々公も襟、上朝、家御、家申大
切儀無候幕京廷逐老不御老達の
迫を之様府の御々壱快末壱の所
の被、、御上寛薩人ニ家人儀置
形相只度自朝大・不て中致有可
情拒管々反命の芸取早様上之取
ニ、威御御速御其敢急え坂候斗
付譎権建自御所外可御も候間旨
、詐を言責遵置報被登此様末、

【198頁】

何時朝廷御危急の御場合ニ押移り候歟も難
斗く、深しく御煩念ニ御被思食候就て御家
老布守衛と人数被差添候、過ルて五月御
実令と有之候て通り弥以進退条不覚悟無之様
地のも用意可為勿論候事

卯九月

右の通公儀御触有之候ニ付及触候事

＊令文『防長回天史』（九）376頁
＊致上坂候様毛利家へ可被相達候」ことの幕
　令が七月廿四日芸州へ伝えられ、これに
　対する藩の意志を示したものである
＊不覚悟　卑怯未練なこと

（慶応三卯九月）

旦那様御事、来月二日御発駕ニて萩通り被
遊御出山候、就ては此度の儀は御家来中御
道口御送りニ不及、尤御発駕前日御暇乞と
シテ御用人座迄可被罷出候事

付り御発駕後、御用人座御裏老座罷出、若旦那様其外上々様方へ御歓可被申上候事

卯ノ九月

（慶応三卯□月）

今上天皇御諱、睦仁と丁卯の雲上明覧
見ニ付て、以来睦の字可相成丈は用捨ニ相
文難避処ニ至ては省画ニ相調候様被仰付仕
鑑事

付り統・恵・兼等の字、是又省画ニ相調候様被仰付候事

＊雲上明覧　皇室公家及び門跡の系譜紋所などを記述したもの

【199頁】
（慶応三卯十一月）

告諭

出兵の御手組不意急襲始終共に応変、

気脈通ず、仰付候

元手貫相居申一同簡単理持無覚束、

の功筈立不の戦の大了のは終静粛

候妨よ手戦防己不申一終共応

も之をは元の気出兵

の候妨功よ手脈貫の御手組被仰付候

あて、をり筈通ず、不意急襲始終共に応変、

れは終貧進相居申一同簡単理持無覚束、

は、ニり撃立不戦防己不申一終共応

か甚報一防居意急襲始終共に応変、

な以国己戦不意急襲始終共に応変、

ら御のの同申一急襲始終共に応変、

す不大了一て急襲始終共に応変、

守本主簡のは襲始終共に応変、

る意趣よ理始等有之候内外共

もニをりニ終有之候内外共

の被誤、付の御候内外共

あ思り自、御候内外共

り召候然先維共静粛

進候様とを持静粛

止　の御争無粛

同進儀手ひ覚応

一む有組或束

（付）

ては

走面の儀得違無之様、可為肝要候事

り々儀得違無之様、可為肝要候事

候は得と相弁、御命令を、相待、別而長官末の

も深のく相弁、御命令を、相待、別而長官末の

無御主様意、ニ其躰隊々基ニをおるすれ厳重ニの

之主様意、ニ其躰隊々基ニをおるすれ厳重ニの

様意、ニ其躰隊々基ニをおるすれ厳重ニの

相制の心得違無之様、可為肝要候事

右の通組支配中えも可被相触候事

従公儀御触有之候ニ付及触候事

卯十一月

（慶応三卯十一月）

御家来中末々地方町浦ニ至迄、暮詰諸願有之銘々、是迄極月十日限り被仰付置候処、已来極月朔日を限り、尤臨時難差置儀出来の節願出度御詮儀の趣有之、此之は出候様被仰付候条、旁向後心得違

右有之節願出度御詮儀の趣有之、此之は出候様被仰付候条、旁向後心得違

制候方処其後の之通間格別の被沙汰付候、尤臨時難差置儀出来の

外て今、後の之通間格別の被沙汰付候、尤臨時難差置儀出来の

ニは事今安通り鋪候事

候受務以政五過ル

込多心五午九嘉

此不端得午九嘉

段被の違九月永

為仰砌の月又六

心付、向又六丑

得候弥も々前十

内　以有前一

意尤前之断一

相非断哉の月

達常のニ趣沙

候臨通相布汰

事時り見告被

の期え相仰

儀限候成付

は過　候、

卯十一月

（慶応三卯十一月）

例年上巳餅米勘渡被仰付候処、御詮儀の趣有之、当暮の分一回に渡方被仰付候事

【200頁】
卯十一月

（慶応三卯十一月）

我皇国時運沿革観るに、昔王綱紐を解

二移て相家権祖宗を保平の乱、

百て、皇国時運沿革観るに、昔王綱紐を解

余よ相家権祖宗を保平の乱、

年り家権祖宗を保平の乱、

を年り家権祖宗を保平の乱、

年り家権祖宗を保平の乱、

の失子、権祖宗を保平の乱、

薄失子、権祖宗を保平の乱、

候の薄失子、権祖宗を保平の乱、

出国竟を年り家権祖宗を保平の乱、

国竟を年り家権祖宗を保平の乱、

竟を年り家権祖宗を保平の乱、

を年り家権祖宗を保平の乱、

年り家権祖宗を保平の乱、

り家権祖宗を保平の乱、

家権祖宗を保平の乱、

権祖宗を保平の乱、

祖宗を保平の乱、

宗を保平の乱、

を保平の乱、

保平の乱、

平の乱、

の乱、

乱、

政刑

当も政刑

習途当も政刑

公習途当も政刑

国公習途当も政刑

家国公習途当も政刑

侯家国公習途当も政刑

ハニを議をに今、政刑

、所保を改不外畢当余よ

尽護尽め出国竟を年り

聊不せし、候の薄失子

不過は、政て交徳ふ孫我を

憚之、聖権は際の事相祖執

忌　必断を、日所不受宗り

諱乍海を朝綱に致少、ニ、

可去外仰廷紀盛ス　我至

申猶万きに難な、今其り

聞見国、帰立る不日職更

候込と同し候よ堪のをニ

ミ可心、間り慙形奉寵、昔

の並協広、、懼勢す眷政王

儀立力く従愈候にとを権綱

も、共矢来朝　至雖蒙武紐

有我ニ下の権況りもり門を

之国皇の旧一やて、、ニ解

十月十日
被成去倉十
仰候ル侯月十
出処十よ十三
候、三り日
旨昨日御二
此十相渡条
如五日候御
相日別紙書
達別の取
候紙通の
の起、
通、御奏
り、御聞
御所相
所より

祖
家
宇
内
来
の
御
形
委
任
厚
、
勢
祭
御
考
シ
依
尚
建
頼
天
白
被
下
の
為
と
旨
在
共
ニ
趣
候
同
尤
え
心
ニ
共
尽
、

方被今宇内来の御形委任厚、勢祭御考シ依尚建頼天白被下の為と旨在共ニ趣候同尤え心ニ共尽、

思召候間聞を食候維持可奉安宸襟、御沙汰

を召候間聞を食候維持可奉安宸襟、御沙汰

致シ、皇国を食維持可奉安宸襟、御沙汰

候力被方祖家宇内来の御形委任厚、勢祭御考シ依尚建頼天白被下の為と旨在共ニ趣候同尤え心ニ共尽ニ

事を思今宇内来の御形委任厚、勢祭御考シ依尚建頼天白被下の為と旨在共ニ趣候同尤え心ニ共尽ニ

右上仰

事出事

追件

支諸

上等

配、

出地

事諸

可等

地件

諸

件

及市侯は外

市侯は外

御中上、夷

中上、夷

沙取京朝一

取京朝一

汰締の廷条

締の廷条

候り上於は

り上於は

事等御両尽

等御両尽

は決役衆

決役衆

先定取議

定取議

是可扱、

可扱、

迄有、其

有、其

の之自外

之自外

通、余諸

通、余諸

り夫の大

夫の大

ニ迄儀名

迄儀名

ての伺

ては伺

、処召被

処召被

十月十五日伝奏日野大納言様方留守居御呼出御渡

同十六日二条御城え留守居御呼出、板倉